

[翻訳]

H. H. ホウベン『ゲーテのエッカーマン ― ある控え目な人間の伝記』(3)

林 久 博

8. 試用期間

優しい守護神に対するエッカーマンの信念は間違っていなかった。つまり彼は運の良い時にフラウエンブラーンにあるゲーテの家に来て来たのだ。ゲーテは文学的な遺産を遺そうとしていた。全20巻の全集を今よりもずっと巻数を増やす予定で、自分の書いたものを選別するのに苦労していた。だが彼の書庫には原稿や手紙が山積みになっていた。ゲーテが自分で整理しようとしなければ、まだ強い関心を抱いていた『ファウスト』第二部や『詩と真実』の続きなど完成させるのは到底考えられなかった。ゲーテはもう何年も前から、その重荷を乗り除いてくれる若者を探していた。決して身近に協力者がいないわけではなかった。文献学者リーマーの原典批評の正確さは信頼できるものであったが、彼は書庫の職員であった。しばらくの間ベルリンで教師をしていた前述のシューバルトがワイマルへ招聘されるという見込みがあったし、ツァウパーという名のピルゼンの教授も考慮の対象となっていた。自然科学や光学などの分野において協力してくれる人は、ワイマルやイエーナ、その他の場所でも十分に足りていた。だが出版契約や印刷所が予定通りの仕事を要求してきても、誰かに親切を強要することはできない。役に立つ人を他所からワイマルへ移住させようとしても、その人が故郷で放棄してきたものを埋め合わせする必要があった。だが雇用関係が再び解消されねばならなくなった時、一体どうしたらいいのだろうか？ 補償額や恩給のことなどゲーテは全く考えていなかった。

そんな時突然ゲーテの前に現れたのが、あてどのない放浪の旅の途上にあった、文学に素養のあるエッカーマン青年であった。彼は自らの過去を断ってきていたが、財布が空っぽだったので、職探しをせざるを得ない状況だった。ゲーテの書庫でしなければならない仕事に、彼は紛れもない才能を持ち合わせていたし、彼に「相応しい」⁽¹⁾ 環境を見つけ出すこともできた。他所からそういった環境を持ってくる必要もなく、すでにそこにあったのだ。そういった環境で何かをしようしても、何の義務も負うこともなかった。

エッカーマンが初めてゲーテと会った時、ベルリン行を薦める曖昧な仄めかしもあった。だが翌日(6月11日)にはもうそのことは話題に上らず、ゲーテは一週間か二週間後にマリーエンバートへ出発するまでエッカーマンにワイマルに留まってほしいと口にした。秋まではイエーナに居を定めてほしい、とも。それからどうなるかは曖昧なままだった。

だが、まずエッカーマンは自分の能力を示す仕事をしなくてはならなかった。『全集』の新巻はゲーテの文学評論をすべて掲載することになっていて、とりわけ1772/73年の『フランクフルト学芸誌』に無記名で掲載された若い頃の評論が必要とされていた。ゲーテ自身、もはや正確には事情に通じて

いなかった。ゲーテは自分が書いたと思う評論をすでに書き写させていたのだが、エッカーマンにこの雑誌の二年分を渡してこう言った。「あなたは私の方法や考え方を知っているから、私の評論を他のものから見つけ出せるでしょう。」⁽²⁾ ここで要求された仕事は、文学史に関する博士論文と言えるものであって、今日でも著名なゲーテ研究者の頭を悩ませるものである。さらにこの40歳年下の若者は、ゲーテの若い頃の評論がまだ価値があるかどうか、また編集上修正する必要があるかどうか意見を求められた。

数日のうちにエッカーマンは、この与えられた課題をゲーテが完全に満足のいくように成し遂げて、すでに書き写してあった写しを手にとってそれを原文と比較した。すると第二の仕事が彼を待ち受けていた。彼が言われたのは、『古代と芸術』四巻本に目次を作り、まだ完成していないすべてのものに特に目を向けてほしい、ということだった。そうすればゲーテがこれらの糸を再び拾い上げて、さらに紡いでいけるからである。6月20日、さらに第三の仕事が加わった。『イェナー一般文学新聞』に載せたゲーテの諸論文に目を通すように言われたのだった。それはこれまでと同様、全集のためである。エッカーマンが21日に別れの挨拶を述べ、22日に郵便馬車でイェーナへ向かった時、いくばくかの自尊心から、彼はあえて自分にこう言い聞かせてもよかっただろう。差し当たり自分に相応しい新しい環境をゲーテ以外のどこにも見つけられなかった、と。つまり彼は短期間だけ、全集の編集と、ゲーテがほとんど一人でその内容を引き受けていた雑誌の手伝いをしたのである。批判的な判断力を持つ若い世代の代表者として、彼はゲーテの手助けをするよう言われたのだった。

異例とも言える素早い決定をして、ゲーテはこの歓迎すべき協力者の運命をしっかりと捕まえておくことにした。ゲーテは枢密顧問官シュルツ宛の手紙を口述筆記させ、自分が求めている若者たちの中にエッカーマンもいることを伝えている。「他の者達と同様、彼も私を手本として成長してきました。ただシューバルトとツァウパーの中間に留まっていたいのでしょうか。彼はシューバルトほど力強く勇敢ではなく、明晰さと繊細においてツァウパーに近いと言えます。」⁽³⁾ — そんな時エッカーマンの最初の訪問が伝えられた。その翌日ゲーテはこう続けている。「昨日彼は自分からやって来たのですが、全くもって善良かつ繊細で、分別のある人に思えます。彼には他の目的地もなかったのでイェーナへ行ってもらい、そこで編集と修正のために印刷しておいた書類の小包をいくつか渡しておくつもりです。私に送ってくれた作品から判断すれば、彼はこの仕事に完全に相応しいように思います。」⁽⁴⁾ 同時にゲーテは、当地にしばらく滞在して「お金をかけないで暮らしたい」⁽⁵⁾ 若者が三ヶ月を過ごすために何が必要か、また当地で規則正しく落ち着いて滞在するために何を「守らねばならない」⁽⁶⁾ かイェーナに問い合わせている。1819年の学生組合員ザントによるアウグスト・フォン・コツェブーの殺害と、その後決定された「カールスパート決議」以来、ドイツの大学は厳しい監視下に置かれていた。イェーナに突然住み始めた学籍のない者は不審者に思われ、警察署での滞在許可が必要だったのだ。また同日ゲーテはエッカーマンの「手紙と原稿」⁽⁷⁾ をコッタに送った。そしてゲーテは、この原稿が一般的にも自分個人にとってもどれほど価値あるものであるか、またどれほど自分が差し迫った状態にあって、全集編集のために他人の手助けを必要としているか、この編集者に説明した。ゲーテはエッカーマンに、被後見人のために必要不可欠な正式な手続きを処理しておくし家具調度も配慮するから

イエーナへ行くのはどうかね、と個人的に言ってくれた。そして特別な使者を通じて、もう22日にはクネーベル宛の推薦状が出されたのだった。——それはほとんどすべて、エッカーマンがコッタ宛の手紙で予測していた通りだった。

ゲーテが必要な旅費を工面してくれたのは想定できることである。エッカーマンが全く見知らぬ土地で不定期間持ち堪えられるほど、懐豊かであるのはまずありえないからである。だがワイマルの手当では多くなかったに違いない。というのも、すでに8月初めにエッカーマンはハンヒェンの支援に頼らざるをえなかったからである。その後も本の収益で辛うじて暮らしていかねばならなかったし、だからこそゲーテの推薦は奇跡的な効力を発揮したのだった。ゲーテにとってそれほど並外れた重要事と言われては、コッタもうまくノーとは言えなかった。7月1日、コッタはこの原稿をイエーナにあるフロムマンの印刷所に送った。「実際にそれほど大したことはないドイツでの売れ行きを考慮すれば」⁽⁸⁾ できれば著者には報酬を安く設定してほしい、とコッタは返答している。エッカーマンは300ターラーを要求した。すぐにコッタは承諾の旨を表明したが、それは彼が付け加えているように「商人としてではなく、あなたの希望に沿い、何かしら素晴らしいものを掘り起こすため」⁽⁹⁾ であった。「商人としてではなく」という言葉には、少タイロニーニッシュな意味合いが含まれている。というのも、高額な報酬要求をエッカーマンが次のように説明しているからである。「商人としての観点から私はあなたに向き合っています。商人は多くの犠牲的行為と労苦に対して埋め合わせをいくらも見出したいものですし、また、さらなる企画に対して励ましの言葉と刺激を受け取りたいものなのです。」⁽¹⁰⁾ ここでは著者と出版者の役割が入れ替わっているようである。

イエーナではエッカーマンへの配慮は行き届いていた。図書館の近くのある、庭に囲まれた家屋に彼は住むことができた。彼は出版者のフロムマン家に急いで紹介された。リーマーはゲーテがあらかじめ頼んでおいた言いつけによって、ハンプルク出身のヨハンナ・フロムマン夫人にこの低地ドイツの同郷人を特に配慮してくれるよう頼んでいた。あなたの影響下であれば、まだ世事に疎いこの客は容易くその内気さや不器用さを克服して「しっかりした自信」⁽¹¹⁾ を身に付けてくれるでしょう、それが後にゲーテの交友関係に仲間入りにするに当たって望ましいものとなりますから、とリーマーは彼女に述べている。この「女性たちの学校」は彼の役に立ったのだろうか？フロムマン家での夜会よりも、老クネーベルの静かで居心地の良い住まいの方が、エッカーマンにはずっと心地よいものだった。

エッカーマンは夏の避暑地に適応するや否や仕事に取り掛かった。彼は仕事をうまくやり遂げる確信があって、そのことをハンヒェンも喜んでいて、この仕事には数ヶ月必要だった。まもなく『論集』の校正用ゲラ刷りも届いた。それどころか彼はすでに『論集』の第二巻も考えていて、第一巻で『親和力』を扱ったように、ゲーテの主要作品すべてを扱ってみたいと考えていた。7月13日、エッカーマンはコッタに第二巻を提案した。だがコッタはどうしても第一巻が成功するまで待って見たかった。もし第二巻で得られる300ターラーがあれば、一年間、エッカーマンの存在は保障されるのだ。だが「理論的かつ批評的な方向性」⁽¹²⁾ をすべて捨て去って、彼が詩人として学んだものを実践的に証明することの方が、前よりも断然よいことではないだろうか？『エドゥアルト伯爵』がすっかり熟してい

るに違いないし、新しい計画、つまり叙事詩や戯曲の計画もたくさんある、と彼は自負していた。この数ヶ月でできた詩をいくつか、彼は10月28日にゲーテに渡している。彼は旅に出て、コッタのお金もたらしてくれる新しい自由を味わってみたかった。他の都市や人々を見てみたかった。南ドイツにも行って、アポロの兄弟たち、つまりホメロスの翻訳者であり『ルイーゼ』の作者であるハイデルベルクの老フォスや、シュヴァーベンのウーラントにも会ってみたかった。彼はずっとライン地方に行ってみたかった。ハイデルベルクではカール・キーゼヴェッターが学生生活を送っていた。でも秋になってゲーテが戻って来ないと何も始まらない！ 彼は一つの異存状態に入り込んで、いい気になっているのではないだろうか？ それが彼のとても素晴らしい計画を無に帰せしめるというのに。フィアンセは彼のことを誇りに思い、ワイマルから届けられた初めての報告を聞いてハノーファーでその成功を喜んでいたので、彼はこうした心の葛藤を彼女には一言も漏らさなかった。しかしゲーテに対して彼は正直に、自分にはイエーナは少し狭い、と告白したのだった。「私は山を越えたところに行ってみたくないと絶えず考えています。心が落ち着かず焦りのようなものを感じて苦しいのです。」⁽¹³⁾ 山に囲まれていると、低地ドイツの平地で過ごしたエッカーマンは圧迫を感じたのだ。彼は地平線まで広がる開けた平野と果てしない雲に覆われた空を必要としていた。自分の運命が幸運な方向へ開けていったにもかかわらず、彼は不安や心の動揺から逃れることができず、彼の詩的な気分や平静さも乱されていった。彼がコッタから受けるであろう300ターラーは、ゲーテの生まれ故郷のフランクフルトのような「活気のある生活」⁽¹⁴⁾ への憧れを胸中に呼び起こしていた。「イエーナは私には静かすぎるのです」と彼は8月10日に書いている。「見るものは何もありませんし、世界から孤立しています。まるでイエーナがすべてであるかのようです。」⁽¹⁵⁾ 彼はイタリアから届くゲーテの手紙いくつかを読んだばかりだった。「何という偉大な生活によって織りなされる新鮮な空気が、人々に向かって流れ込んでくることだろう！ (...) それらの半分でも見られたら私には十分です。こんなにも私は生活を熱望しているというのに。」⁽¹⁶⁾ 「重要な生活の要素」⁽¹⁷⁾ や活気ある民衆の喧騒、芸術や良い劇場、そういったものがある大都市へ彼は行ってみたかったのだ。こういう都市でこそ毎日新しい刺激を得て、邪魔されることなく制作活動に没頭するために、ひっそりと狭い穴に入っていくことができる。海も一度見てみたかった。北海でも構わない。地中海にも一度も行ったことがない。何という悪魔が突如として農夫の息子で田舎者の彼に取り憑いたのだろうか！

ゲーテだったらこうした気持ちはよく分かるだろう！ だが彼は差し当たり、新しい弟子が進むべき道を全く別の方向へ決めてしまった。ゲーテは優しく落ち着いた言葉でエッカーマンに話しかけ(8月14日)、計画していた仕事をして、静かな活動をして過ごすよう指示したのである。「静かな活動をしていれば、最後には最も信頼できる純粋な形で、世界の展望や経験も生まれてくるものだから」⁽¹⁸⁾ と言って。しかし「私が帰って来た時にあなたの幸せについてより一層相談できるように」⁽¹⁹⁾ あなたの願いと計画と一緒に考えてみましょう、とゲーテは断言している。良かれ悪しかれ当分の間は静かなイエーナという村で耐え忍ぶ時だった。コッタからお金もまだ届いていなかったのも、なおさらそうしなくてはならなかった。

その5日前に、ゲーテは枢密顧問官シュルツに次のように説明している。「エッカーマンはイエー

ナにいて、私の書類に取り組んでいます。仕事を頼んでみて分かったことですが、彼は実によく考えて仕事に取り組んでいます。私は彼を引き留めておくつもりです。(…)彼は私の考え方を熟知しているので、そのセンスに従って上手に仕事をやってくれますし、また仕上げに関して言えば、私自身よりも上手に仕事をこなしていると言っていいでしょう。」⁽²⁰⁾ この新しい協力者に関して、これ以上褒めるべき点を挙げるができないほどだった。こうして試用期間が過ぎ去り、彼は試練を乗り越えていった。

9. ワイマルでの初めての冬

9月半ばになってようやくゲーテはワイマルへ戻って来たが、彼はまずイエーナへ向かった。ゲーテはエッカーマンと最初に会ったときっぱりと次のように切り出した。「この冬の間中、あなたには私のいるワイマルに留まってほしいと思っているのです！」⁽²¹⁾ この小さな首都のあらゆる教育手段を自由に使ってよいし、劇場や図書館、また優秀な人達との付き合いなどもあります、その中から一番良いものを見つけ出せばいいのだし、冬の間一瞬だって無意味な時間を過ごして自分が下した決定を後悔してはいけない、とも。さらにゲーテはこう付け加えた。ワイマルを定住地に選んではどうか、と！ この町の利点と魅力をゲーテは極めて魅力的な色彩を施して彼に説明した。「夏には旅行をして、見たいものを次々に見てみればよいでしょう。私は50年ここで暮らしているが、行ったことのない所はどこにもありません！ — だがいつもワイマルへ帰って来たくなるのだよ。」⁽²²⁾ ゲーテたったの勧誘に逆らうことなどエッカーマンにできただろうか？ ゲーテという巨人の陰で暮らすことより大きな幸福などあるだろうか？ 彼はこの誘いに恐縮しながらも心を動かされ、差し出された手の中へ落ちていくのである。他者に奉仕するエッカーマンになるために、どれほど自分自身を断念しなくてはならなかったか、彼にはまだ予感できなかった。

またゲーテはすぐに計画的な行動を取った。つまり、ほとんど女性的とも言えるこの従順な人間に対して心を見つめ直すよう促し、柔らかな支配力によって、自分の道へと引きずり込んでいったのである。17日、ゲーテはエッカーマンと長い会話をしたが、それは完全にこの目的のためである。「細かな点まで制御できない素材を扱う大作には、差し当たり用心するのですよ」とゲーテは言った。短く要約すれば、これは父親がするような思いやりある忠告である。「とりわけ自分の着想に懸命になってはいけません！ 一日でできる短い詩とか、せいぜい雑誌やポケットブック用の批評論文が当分はあなたの仕事です。そしていつも自分の感覚に従って下さい。他人の要求に従ったものであってはいけません！ あなたが熟知している素材をいつも選ぶようにして下さい！ そうすれば仮に一旦何かがかうまいかなくなってしまうても、あなたがとりわけ手にしていなければならない人生の快活さとか楽しさが曇ってしまうことはありません！」

この偉大な方法が、エッカーマンの覆い隠された魂にどれほど深い洞察を与えたことだろう。若くて自信のある人であれば、こういった冷たい忠告に逆らおうとするものだ — だがこの忠告は、エッカーマンの心から重荷を取り除くものだった！ そう、季節についての詩とか悲劇を書き直すという

大きな計画が彼にはあった——これらの計画を考えていたせいで、どれほど多くの快適な日々をこれまで無駄に過ごしてきたことだろう！彼は喜んでこう述べている。「今、私はこれらの計画を思い切って投げ捨てたのでした。いつか私が世界に精通して素材の個々の部分を我がものとするようになり、対象も部分も一つ一つ明るく再び取り上げて書き出すようになるまで、それらは当分そっとしておくことにしよう。」⁽²³⁾ 人生の快活さと楽しさ——それは確かに彼がどこでも欲しがっていたもので、詩人の厳粛な時間になかったものであり、また真っ先に戦い取らねばならなかったものだった！この驚くべき老人は何と正しいことを言うのだろうか！「季節」のことはもう二度と話題にならなくなり、『エドゥアルト伯爵』も断片のままとなった。こうしてエッカーマンは熱狂的にゲーテの教えに従っていった。それだけでなく、苦勞している仲間達にもすぐにそれを伝えたのだ！「真の近代性がどこにあるかご存知ですか？」と二ヶ月後にエッカーマンはハインリヒ・シュティークリッツに問いかけている。シュティークリッツにとって、エッカーマンはすでに一人の預言者となっていた。「個人の力を越えた意志というものの中に真の近代性があるのだ、とゲーテは言っています。ですが、そういったものには用心して下さい。それはシラーにも見て取れますが、欠点のあるものなのです。」⁽²⁴⁾ それ故彼は、大作に取り組んだり自分の着想にこだわることをシュティークリッツに警告したのである！彼は弟子時代の最初の頃は、ハイネがそう呼んだように、ちょっとした「ゲーテの口真似をする人」⁽²⁵⁾であったのは間違いないだろう。

9月末、エッカーマンは師匠の後を追ってワイマルへ赴いた。29日にゲーテに会い、10月1日には劇場の指定席を割り当てられた。それによって彼のワイマル定住は決定的なものとなった。それまでは依然としてライン地方への旅行が彼の念頭にあった。コッタからの300ターラーも手に入った。こんなにたくさんの金額を一度に所有したことはこれまで一度もなかった！自分で稼いだお金で初めて旅行に出ること——こうした高揚感に匹敵するものは僅かしかない。キーゼヴェッターも、ハイデルベルクで葡萄摘みをして旧交を温めよう、と言ってくれた。エッカーマンがすぐにハノーファーへ戻って来るのを、ハンヒェンはとっくに諦めていた。今やキーゼヴェッターの誘いにも、こう言ってエッカーマンは断った。天気も悪いし、とりわけゲーテが旅行を阻むのだ、と。この報告は「青天の霹靂」⁽²⁶⁾のように友人にショックを与えた。だがエッカーマンは不動のままだった。

ワイマルに到着したばかりの頃、ゲーテはエッカーマンを大量の原稿の小包の前に連れて来て、こう打ち明けたことがあった。「これら全部の書類の中から使えるものと使えないものを選び分けて、問題のあるものや不完全なものについて私とじっくり話し合っ、出来上がったものを書き写し、全部を意味があるように並べて全集にまとめ上げるのは何年もかかる仕事です。あなたがそれを引き受けてくれるおつもりなら、私は大きな不安から解放されて、まだ残っている力で新しいことに取り組んで、とりわけ『ファウスト』や『詩と真実』を完成させられるでしょう。」⁽²⁷⁾ そのような将来の課題を前にして、慰安旅行のことなど話題にできただろうか？ 信頼して与えてくれたこのポストに明日よりも今日就いてくれれば、ゲーテも彼に腹を立てることはないのではないか？ 自分にこれほどまでに「相応しい」環境を、彼はこの世のどこにも見つけることはできなかった。要するに、彼の計画は当分の間お預けなのだ！ だが半年仕事に打ち込めば、ライン川やハイデルベルクへの旅行を心

置きなく取り戻すことができる。だから今はここにいないてはならないのだ！

10月2日、エッカーマンはゲーテの家でベルリンの枢密顧問官シュルツと知り合いになった。シュルツはゲーテがこれほどまでに自慢している協力者にとっても関心を寄せていた。3日、エッカーマンは出版社から送られてきたばかりの『論集』の最初の一冊を、次のような詩的な献辞を添えてゲーテに送った。それは「私が正しくあるのであれば、それはひとえにあなたのおかげです」などの言葉であり、イエーナで授かった数々のよい教訓の思い出が記されていた。14日、彼は大きなお茶会に招待された。一番最初に到着して、ゲーテが現れるまで煌々と明かりの灯ったまだ誰のいない部屋の中を、落ち着かない様子で歩き回った。アウグストとオットーリーエ、法務長官フォン・ミュラー、皇太子の教育係を務めるスイスからやって来た若い学者ソレ、枢密顧問官マイアー、ベルリンのフォン・サヴィニー教授夫妻、その他いろいろな人と知り合いになった。19日、彼は初めてゲーテと食事を共にした。水入らずの内輪の席で、彼の今後の勉強のことが話題になった。とりわけバイロンが読めるよう、まず英語を勉強するように言われた。ゲーテは『ドン・ジュアン』を書いたこの詩人を高く評価しており、オットーリーエも彼の愛読者であった。だがワイマルの語学教師から本当の教師は誰も現れなかった。食後にゲーテは光学上の実験をいくつか見せてくれた。エッカーマンはそれがさっぱり分からなかった。この日、彼は見聞きしたことで頭が一杯になって帰途に就いた。ここで頑張り通すために、まだ学ばなければならないことがたくさんあることを知って彼は怖気づいてしまった。しかし彼は精いっぱい努力し、ゲーテは彼の熱意を信頼で報いた。エッカーマンに対するゲーテの信頼は、年齢や社会的地位という違いを埋め合わせているようである。つまりエッカーマンは10月27日に「情熱三部作」の最初の読者となったのだ。「マリーエンバートの悲歌」では、(ウルリーケ・レヴェッツォーへの)老人の最後の恋が激しい炎を上げて燃え上がり、それは——驚愕した家族が沈黙化させたために——諦めの灰となって消されていた。11月1日には共同作業も始まった。エッカーマンは古い手紙や日記から1797年の『スイス紀行』を編集し、今日的観点を元にして形に仕上げた。突然ゲーテが病気になった。一人ぼっちの寝床の上で、ゲーテは自分の文学的な遺産をどのように遺していくか関心を寄せていた。今回もまた元気になれば——そんな希望を抱いていたが、発作が彼の力を弱めていった。ゲーテはすでにエッカーマンなしでやっていくことができなかった。だがもし自分の道を歩んでいくという野心にエッカーマンが駆り立てられれば、今後一体どうなってしまふのだろう？ たくさんの文学的な草稿が、ゲーテの家に入出入りするエッカーマンに読んでほしいと山積みになっているというのに。この男に頭を下げてお願すべきではないか！ 11月24日に再会した際に、二回目の決定的な話し合いがもたれた。エッカーマンは『芸術と古代』のためにプラテン伯の『ガゼール』について少しばかり自分の考えを書き記していた。ゲーテはエッカーマンの批評に関する才能を称賛し、彼に「我が国の最近の才能のある人達の」⁽²⁸⁾ものを勉強するように勧めた。だが同時に次のように付け加えた。「もし他所から文学上の依頼が来るようなことがあったら、そのようなものを断るか、または少なくとも前もって私に言ってほしいのだ。こうやって一旦私とのつながりもできたのだから、あなたが他の人と関係を持つのを私は望んでいないのだ。」⁽²⁹⁾

エッカーマンは巨匠の望みを自ら進んで約束した。つまり彼は9月に認めてもらった「仕事」⁽³⁰⁾の

半分だけはまだすることが許されたのだが、こうした新たな制限の中にあっても、他方で精神的な利益だけは視野に入れていた！「もしそれが相応しいものでなければ判断する価値はありません」⁽³¹⁾ というようなゲーテの言葉を聞いてから、彼はそれを自己省察を促す言葉として利用した。その自己省察は、永遠に失われない価値を持つものを批評的な観点から判断するには自分には経験も理解力も欠けている、だから差し当たりもっとたくさん詩だけ書いていよう、という認識へ至るのだった。「青年時代から、我々は老人による行為や判断というものを必要とするものです。アキレウスは殴りかかる場面ではよいものです。だが、その決定が重要となってくる場面で忠告が必要な時には、ネストル（トロヤ戦争に参加したギリシア軍の老将）やオデュッセウスの言葉に耳を傾けるものです。」⁽³²⁾ エッカーマンは決して一人のアキレウスではなかったが、ゲーテと比べても若すぎたのだ。優れた才能を持つ者であっても、年齢を重ねたゲーテのこうした人生観に合わせることなど不可能だっただろう。

こうして二人は熱中して共同作業に取り組んでいった。『芸術と古代』の編集は主にエッカーマンに押し付けられた。12月には『西東詩集』に取り組むことになった。ゲーテのあちこちに散らばった細々とした詩が集められ、その合間に『クセーニエン』と様々な比較的古い草稿が検討された。『芸術と古代』の最新刊の「付属広告」⁽³³⁾（今日では「本のジャケットの折り返し広告」と呼ばれる）を3月20日に仕上げ、冬の仕事は終わった。ゲーテはその間に集中して自分の人生録を書き続けることができた。そしてシラー宛の自分の手紙が往復書簡出版のために遺族から引き渡された時には、自伝に関する仕事でほとんど窒息せんばかりだった。だが、始まりだけがあって終わりが予想もできなかった『ファウスト』執筆という「主要業務」に際して、ゲーテはエッカーマンによって負担が軽減され、少なくとも仕事を進めることができた。ゲーテは賞賛を惜しまなかった。「エッカーマンは蟻のように私の詩を一つ一つ一緒に運んでくれます。彼がいなければここまで来なかったでしょう」⁽³⁴⁾ とシュルツ（1824年3月8日）に書いており、また2月4日にはネース・フォン・エーゼンベックに次のように書いている。「彼が私の著作に愛情を注ぎ、私という存在そのものに合致してくれているので、私は素晴らしい成果を上げています。私がかもはや関心を抱いていないことにも、彼は関心を寄せてくれます。自由な洞察力や他者を思いやる素質があるので、彼はこの仕事に向いています。またこの仕事は同時に彼を喜ばせてもいるのです。」⁽³⁵⁾ ゲーテはボンに住むこの友人に対して、冬の間の緊張を要する仕事の報酬として夏にはエッカーマンをライン川へ送り出すつもりである、とこっそり漏らしている。コッタに対してもゲーテは折に触れ「少なくともは経費」⁽³⁶⁾ を思い出させている。ゲーテがそうするのは「協力者の扶養と報酬」⁽³⁷⁾ が発生したからであり、間もなく出版される『著作集』新版を自分にとって望ましい形にしたいからであった。ゲーテがイエーナでエッカーマンを手元に置いておこうと努めていた時に、エッカーマンに約束したことをゲーテは忠実に守った。つまり、エッカーマンは毎日自由に劇場に出入りできたのである。それまでは全く劇場に疎遠だったが、間もなく彼は正真正銘の「劇場狂い」となっていった。彼は——僅かな例外があるものの——ゲーテの友人たちともうまくいき、ゲーテの家の洗練された芸術品の品々を、その所有者の個人的な手ほどきを受けながら見せてもらった。ゲーテは芸術を愛するこの青年に対して、絵画と彫刻もそれ自体において一つの意味となるように芸術の見方を熱心に教えた。エッカーマンの『論集』の中のある箇所を讀

んで、ゲーテは彼のズライカであるマリアンネ・フォン・ヴィレマーのために詩を書く気になったことさえあった。ゲーテの友人達の記念日にはエッカーマンは詩を作り、作曲家エヴァーヴァインがこの祝宴詩に曲を付けなければならなかった。エッカーマンは毎日のようにゲーテの家に赴いた。ゲーテや彼の息子の部屋で催される打ちとけた夕べには、彼は欠かせない存在だった。だが彼は華やかさや騒々しさに圧迫されて、劇場の落ち着いた薄明の中に逃げ出してしまうような時には、老ゲーテは微笑んで彼の好きなようにさせた。ゲーテが読んだ本をエッカーマンは自分の小部屋に持ち込んだ。会話がその本のことになった時に備えて、内容をよく知っておかねばならなかったのだ。確かに彼の英語の勉強はまだこれからで、「自然の対象」⁽³⁸⁾ に対する特別な才能を詩の中で実行に移すよう、励ましの言葉がないわけではなかった。だがこの半年で、詩作の成果は予想に反して僅かだった。本格的に詩を書くという課題を、ゲーテはすでに 10 月 27 日には彼に出してさえいた。つまり、四季について書くのを断念する代わりに、ティーフルト小城を詩にするようゲーテから言われたのだ。しかしこのモチーフはエッカーマンにはまだ新しすぎて、縁遠いものだった。詩を作ることを自分の使命だと熱烈に信じていたにもかかわらず、彼は「自分が生み出したものが持つ若々しくて力強い衝動」⁽³⁹⁾ をいつの間にか抑え込んでいた。彼はツァウパーにこう書いている。「この愛すべき老人」⁽⁴⁰⁾ が過去に成し遂げた文学上の仕事のことで心配しないように配慮して、「現在における影響力のために道を空けておく」⁽⁴¹⁾ という以外、私は文学に貢献することはできないでしょう、と。このゲーテのために校正だけをしていれば、自分の詩を書くことによってもたらされる以上の文学的功績をお前は上げることができるのだ！ という認識は、自分の能力を過大評価することによって可能となる、健気な自己認識からなされる行為である。

その他に何が彼を駆り立てたのだろうか？ 間違いなく彼は自分に基礎知識がないことに悩んでいた。毎日果てしなく多くのことを耳にし、しかもそれは全く聞いたことのないことばかりだった。ゲーテが編集上の話し合いによって刺激を受け、思い出に耽り、本題から逸れて心中を吐露し、聞き手が自分の話についてこられるかどうか考えもしないで話している時には、立派に持ち堪えようと溶け込む努力をしなければならなかった。なぜならゲーテは話すことが好きだったが、自分の考え方にすでに近づいていたこの人に、話を聞いてもらうだけでなく理解してほしいのだ。『植物の変態』や『色彩論』といった学問上の著作がいつも彼の口先まで出かかっていた。野心、他人の無理解に対する怒り、反論されたことに対する怒りの爆発、承認の不足、そういったものがいつも絡み合っていた。彼とは正反対の考え方の持ち主であったイギリスの物理学者ニュートンの名前が出ると「重々しい空気」となった。エッカーマンはゲーテの書斎に入ると、最初の一年目には、受験者が胸苦しさを覚えるような気持ちに絶えず襲われた。彼は大学の講義のように、その時間に備えて準備しなくてはならなかった。そして彼は、そこで聞いた最上のものを文書の形で家に持って帰るという欲求に目覚めた。それはほとんど本を買えなかったかつての大学生には当然の行動であった。聞いたことが著作集編集の勉強の土台となるような、まだ自分の耳に響き渡る卓越した名言を、彼は大急ぎで家に帰って書き留めた。それ以外にどうやって彼は自分をゲーテに繋ぎ留めておくことができただろう？ まさしく彼のために用意され、彼を研ぎ澄まし安心させてくれる多くの言葉が、どれほどここに零れ落ちてい

たことだろう！心地よい声の響きで語られるこれらの言葉が鳴りやんでしまうことなどあるだろうか？

さらにエッカーマンは詳しい手紙を書いた。彼が何をしているか花嫁が詳細に知りたがったのだ。ゲーテとの生活に彼が少し自慢に思っている、それは許されることではないだろうか？彼は自身自身の発展を客観視することを早くから学んでいた。自分の存在がこれまでよりもはるかに重要になった今では、それはずっと詳細なものとなっていた。そのために与えられた形式は日記であった。ハンヒェンへの日記のような手紙がその役に立った。後の『ゲーテとの対話』の最初の原型がここで生み出された。これらの初期の手紙は残っていないが、それらはもちろん、後にどうしても必要となった修正を多く施され『対話』に組み込まれた。最初の頃、彼はどれほどゲーテのことを誤解していただろう！最初の数年に記された『対話』の多くの個所には、手紙形式から生まれたという紛れもない痕跡が残されている。

だが4月末になると、ハンヒェンには不十分な報告しかできなくなっていった。聞いたことを思い出し、補足し、訂正するために、エッカーマンは手記さえも必要とした。というのも、思いがけない会話が同じ主題へと戻ってしまうことがしばしばあったからである。優れた記憶力があれば事足りる短いキーワードを書き記して、間に合わせなければならぬことがしばしばあった。そんな状態であれば、ハンヒェンの方からどっちみち何もできはしないだろう。また彼女は無邪気なまでに口が軽く、彼の報告文はハノーファーの友人達の手から手へ渡り歩くこととなった。それがなくなってしまうかもしれないというのに。さらに彼とゲーテの間には、他人には聞かせられないことも数多く話題に上がった。だからエッカーマンは自分用の日記も残していた。それは本の形ではなくバラバラの紙に書かれていて、後で自分の好きなように綴じ合わせるものだった。またそれは決して規則的には書かれなかった。つまり *nulla dies sine linea* (何かを書かない日はない) は決して彼の関心事ではなかったのだ。彼はこれらのメモを通じてまず学び、ゲーテの思想を自分に馴染ませようとした。ドレスデンで俳優として舞台に立っていたアウグスト・キーゼヴェッターがファルクのもとにいる間は、彼はシェークスピアに関するゲーテとの会話をすべて記録しておかねばならなかった。そうすればお前は何かを学んで「偉大な理念へと到達」⁽⁴²⁾ できるのだ、とファルクが主張したからである。ゲーテのもとでそれを望み、そうせずにはいられない得ない者にとって、こうした記録を残しておくことは当然の成り行きであった。

エッカーマンがそれを文学的に利用してみようとするのは当然のことである。彼は自分を作家だと思っていたのだから。もしそれが『論集』の第二巻になれば、ゲーテ自らの口から語られる言葉によって、比較にならない高い価値を自分の文章に与えることができる。ファルクもまた、かつてゲーテと行った対話を数多く記録していた。おそらくエッカーマンもそのことを知っていた。彼は初めのうちはファルクとの付き合いも多かった。だが、ゲーテがファルクのことをよく言っていないことに気付いてからは——おそらくゲーテは自分の死後、ファルクが軽々しく自分のことを話すことを恐れたのだろう——エッカーマンはワイマルでの最初の支援者を「切ら」なければならなかった。またキーゼヴェッターの母親との貸し借りの清算に際して、腹立たしい話し合いもあった。だがその前に、お

しゃべりなファルクはゲーテの新しい人生の伴侶に対して、自分が記録を残していることを打ち明けて、そのような秘密書類を利用する機会を絶対に逃さないよう忠告したのかもしれない。そのような記録から生まれてくるものを、エッカーマンは二冊の本に見て取っている。ゲーテは彼の協力者たるエッカーマンにもそっとその二冊を手渡していたのだろう。一つはナポレオンの晩年に関する極めて重要な作品で、ゲーテが1824年に読んだラス・カーズの『セント＝ヘレナ覚書』であり、もう一つはトーマス・メドウィンの『パイロン卿の会話日誌』である。この本については1824年以降ゲーテの家でじっくり話し合っていた。これらの模範のおかげで、エッカーマンは日記という形式が到達できる射程範囲を思い浮かべることができ、勇気づけられたのだった。またこれらの模範は、彼にそのような計画の技巧を伝授してくれた。彼が一冊の本を執筆するのに十分な素材がいずれは集まるのだろうか？ 本になるかどうかは、ワイマルでの彼の滞在がたった一つのエピソードにすぎないか、または長期間に渡るものであるかにかかっていた。その機会が長期に渡って提供されるなら、彼はそれを絶対に利用するつもりだった。家族ぐるみで親しくしている人達、つまり法務長官フォン・ミュラー、リーマー、それにソレも、ゲーテとの交流について本を書いていることを、彼はおそらくすぐに嗅ぎつけた。

ワイマル時代初期の日記の一枚に記されているのは、1824年2月25日、27日、29日の記録で、それは後年多く残されていたような短いキーワードの書かれた日記用のメモと、『対話』印刷用に推敲された文章の中間形態と言えるものである。書き始めた頃は、もちろん彼はまだ不安を感じていた。しかし数年後には、上機嫌のうちに、日記の大部分を内容も分かる形で完璧に書き記すことができたので、それらはそのまま『対話』に採用することができた。

ゲーテはこの記録の存在を知っていたのだろうか？ 「私達の間には真実がなくはなりません！」⁽⁴³⁾ 『イフィゲーニエ』の中のオレストの言葉はエッカーマンのモットーであった。1824年2月15日、すでに彼はゲーテに「以前の話し合いを書き記したもの」⁽⁴⁴⁾ を持参している。注目すべきことだが、彼が二人の話し合いを日記に書き記すには、この事実があればゲーテには十分だったのだ。ただ彼は、ゲーテがこの試みを喜んでいることだけは気付かなかった。20年後エッカーマンはハインリヒ・ラウベ宛の手紙で、ゲーテが2月のあの日、彼に言ったことを次のように語っている。「あなたは何か長続きすることをなさるでしょうし、文学はあなたに恩義を感じることでしょう。私が思うに、当地での滞在は確かにあなたの意に沿ったものではありませんでしたが、苦勞してアメリカへ行ったシャトブリアンより容易に、あなたはよい本を作るでしょう。」エッカーマンの計画は、巨匠と生徒との間の信頼をさらに強くする新しい絆であった。

本稿は H. H. Houben: Goethes Eckermann. Die Lebensgeschichte eines bescheidenen Menschen. Berlin/Wien/Leipzig (Paul Zsolnay) 1934 の第8章から第9章までを訳出したものである。第8章までは以下を参照のこと。

林久博：「翻訳：H. H. ホウベン 『ゲーテのエッカーマン — ある控え目な人間の伝記』(2)」、『教育養育研究院論叢』第1巻第1号、中京大学教養教育研究院、2020年、55～88頁

注

- (1) Houben, Heinrich Hubert: J. P. Eckermann. Sein Leben für Goethe. Teil 1. Nach seinen neu aufgefundenen Tagebüchern und Briefen dargestellt. Hildesheim (Dr. H. A. Gerstenberg) 1975, S. 118.
- (2) Eckermann, Johann Peter: Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens 1823-1832. Berlin (Deutscher Klassiker Verlag) 2011, S. 42.
- (3) Goethe: Werke. Herausgegeben im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. IV. Abt. Bd. 37. Weimar (Hermann Böhlau Nachfolger) 1906, S. 71f. [Brief an Schultz (11. 6. 1823)] (Reprint: Sansyusya)
- (4) Ebd., S. 74.
- (5) Ebd., S. 77. [Brief an Weller (11. 6. 1823)]
- (6) Ebd.
- (7) Ebd., S. 62. [Brief an Cotta (11. 6. 1823)]
- (8) Houben, S. 134.
- (9) Ebd.
- (10) Ebd., S. 134f.
- (11) Ebd., S. 136.
- (12) Eckermann, S. 45.
- (13) Houben, S. 139.
- (14) Ebd.
- (15) Ebd.
- (16) Ebd., S. 139f.
- (17) Eckermann, S. 45.
- (18) Ebd., S. 46.
- (19) Ebd., S. 45f.
- (20) Goethe, S. 179. [Brief an Schultz (9. 8. 1823)]
- (21) Eckermann, S. 47.
- (22) Ebd., S. 47f.
- (23) Ebd., S. 52.
- (24) Tewes, Friedrich: Aus Goethes Lebenskreise. J. P. Eckermanns Nachlaß. Bd. 1. Berlin (Georg Reimer) 1905, S. 139.
- (25) Houben, S. 144.
- (26) Ebd., S. 145.
- (27) Ebd., S. 146.
- (28) Eckermann, S. 78.
- (29) Ebd.
- (30) Ebd., S. 47.
- (31) Houben, S. 152.
- (32) Ebd., S. 153.
- (33) Ebd., S. 154.
- (34) Goethe, Bd. 38. S. 66. [Brief an Schultz (8. 3. 1824)]
- (35) Ebd., S. 42. [Brief an Nees von Esenbeck (4. 2. 1824)]
- (36) Houben, S. 156.
- (37) Ebd.

- 38) Eckermann, S. 63.
- 39) Houben, S. 158.
- 40) Ebd.
- 41) Ebd.
- 42) Ebd, S. 173.
- 43) Goethe: Iphigenie auf Tarius. In: Goethes Werke. Bd. V. München (C. H. Beck), S. 36. (Z. 1080-1081.)
- 44) Houben, S. 164.